

## 「能舞台に棲む魔女」

平本弘子

声楽家にとって、歌う「舞台」がどこで、そこはどんな響きがあるのかというものは大きな課題です。それは、生の声で歌う者にとって致命的なほど、演奏効果を大きく左右します。

西洋の音楽は教会から始まり石造りの建物の中で育まれ、現代では主にコンサートホールで演奏されますが、その空間をどのように響かせるかが大きなポイントで、また聴衆の楽しみでもあります。オペラや宗教曲、芸術歌曲などの声楽文化も、何百年前からの、当然ながらマイクは使わない超アナログの世界だという点では、能楽と同じ「伝統文化」なのです。

若い頃、発声技術は手探り状態でしたが、初めて旅したヨーロッパの建物の中で声を出した途端に、「ああこれなんだ」と一瞬にして目が覚める思いがしたものです。石造りの建物の中で心地よく響く乾いた声の波動は、日本の畳と障子の部屋では生まれるはずもなかったのです。

ちなみに、福山のリーデンドローズは世界のホールを手がけた音響設計家の豊田泰久氏によるもので、近隣でも名高い、優秀な音楽ホールです。福山の人々は幸せです。

ドイツ歌曲を学び、オペラでもお役をいただき、様々な西洋と東洋のいわば「文化の違い」に翻弄されながら、五十歳の手前で私は残りの人生を「日本歌曲」に捧げる道を選びました。

この度、大島能楽堂が取り組んでおられる「福山城築城四百

年記念行事・福山名所コンサート」第九回「芹田川と明王院」が十月三十日に能楽堂で開かれ、私に「日本歌曲を…」というご依頼をいただきました。

さて、何を歌いましょうかと迷い、福山城築城四百年に因んで、「荒城の月」を始め六曲を選ばせていただきました。

中でも、「小面幻想」作詩：鶴岡千代子 作曲：平井康三郎は小面に魂を込める彫師の熱い思いを綴る歌曲で能舞台に相応しいと、思い切って初挑戦いたしました。



伴奏は今回電子ピアノで代用、ピアニストの山岡珠代さんが一緒にしてくださいました。

実は能楽堂で歌うのは二度目です。

十五年前、(旧)福山市立女子短期大学の公開講座で、「日本の能楽」と「西洋の声楽」の比較とコラボがテーマでした。平尾貴四男作曲による楽劇(カンタータ)『隅田川』、船頭を敬愛する大島衣恵さんが謡われ、狂女を私が歌うという、今思っても心躍る企画でした。

しかしその時の私にとって能舞台は、ホールのようには優しく包んでくれない手ごわい場所という印象でした。

それが、今回は全く違ったのです。私も年齢を重ね、日本歌曲に対する気構えもそれ相応に備わってきたからでしょうか。あるいはめずらしくお着物で歌ったせいでしょうか。

久々に立たせていただいた能楽堂の舞台中央部分はおびただしい能楽者たちの摺り足の熱量で擦り切れ、見え隠れするその木肌の白さも貫禄十分で迎えてくれました。

さすがここは日本語を解き放つ舞台、言葉をくつきりと載せて歌い始めたら突然、私を誘ってくれる頼もしい魔女が現れたのです。能楽堂の舞台に棲む魔女!!

十五年前には冷ややかだった魔女は笑顔で現われ、「いらっしやい、こちらですよ」と優しく手をとって微笑んでくれました。能楽堂に棲む気高き魔女さま!! 次にお会いする時はどんな表情で現われていただけるのか、今からとても楽しみです。

令和三年(2021)十二月 記

### 平本弘子 声楽家

広島大学教育学部音楽科卒業。

シュツットガルト音楽大学に留学。

1975年～2005年の間中国二期会でオペラ活動に携わる。

ソロリサイタルは、これまでに福山を中心に16回を重ねる。

第一回榛名梅の里日本歌曲ゼミナールにて最優秀賞を受賞。

それを機に東京での活動を展開。

東京室内歌劇場主催・旧奏楽堂での「日本の四季シリーズ」、

東京音友ホールでの「日本歌曲と詩人の心」他に度々出演。

2003年、銀座王子ホールにて成功させたリサイタル「女たちの声」では歌曲集『歳をとるほど大胆になるわ』を委嘱初演し、世に送り出した。

近年では、主宰するStudio歌鈴で上演する落語オペラ(作曲:加藤由美子)が好評である。演題としては「芝浜」「寿限無」「小唄唄」など。

2004年に立ち上げた「ふくやま日本歌曲塾」の代表として、福山を中心に日本歌曲の文化を育み、発信している。

(旧)福山市立女子短期大学名誉教授 福山市立大学非常勤講師

ふくやま日本歌曲塾代表 Studio歌鈴主宰 夢二コンクール審査委員

